

熊谷市中条出土遺物－鏡・刀・玉－

中島利治・大和 修

今回ここに紹介する鏡・直刀・ガラス玉は、他の様々な資料と共に、行田市埼玉の戸田栄一氏が永年に亘って集められたものを、御子息である迪夫氏から、平成2年に当資料館に寄贈されたものである。これらの鏡・直刀・ガラス玉は一括して戸田氏が坂口先生という方から寄贈されたという書きつけが残っており、熊谷市中条で採集されたものと記録されている。以下紹介する。

獣形鏡（六獣鏡）

鏡面径 12.4 cm、縁厚 0.3～0.35cm、鏡面厚 0.18～0.2cm。平らな鏡面は、縁部で 0.1cm の、わずかな反りをもって立ちあがる。鏡面、背面ともに一部錆がみられるが、全体的に鉛黒色の地肌をし、 casting 良く、鮮明な良質の青銅鏡である。

鈕は径 2.1cm の半球形を呈し、長方形の鈕穴が貫通し、円座状の界線が部分的に認められる。内区には、頭部を左にした半肉彫の獣像が 6 个体時計回りに巡っている。獣形は、細線で表した長い首に、三角状の突起で表現された頭部をもち、胸部と腰部が強調され、半肉彫され、四肢や尾は形骸化し、細線で表現されている。獣像は同じ図像がくり返されているが、一つの像は、他の像と異なり、頭部を胸部の下方に表している。内区外周の銘帯部分は、複波文帯、無文帯となっている。

外区は、内区部分より薄く、外向鋸歯文が二重に巡っている。縁部は無文帯 1.4cm と幅広く、やや反りのある斜縁となる。倣製鏡。

直 刀

直刀は、茎尻及び切先部分を欠いており、刀身のほぼ中央部で接合しない部分があり、残存長は 78.0 cm である。遺存状態は悪く、一片 6～9 cm に割れていた。平棟平造りで刀身長は 66.8 cm、茎長は 11.2 cm である（残存長）。

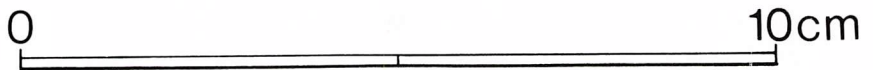
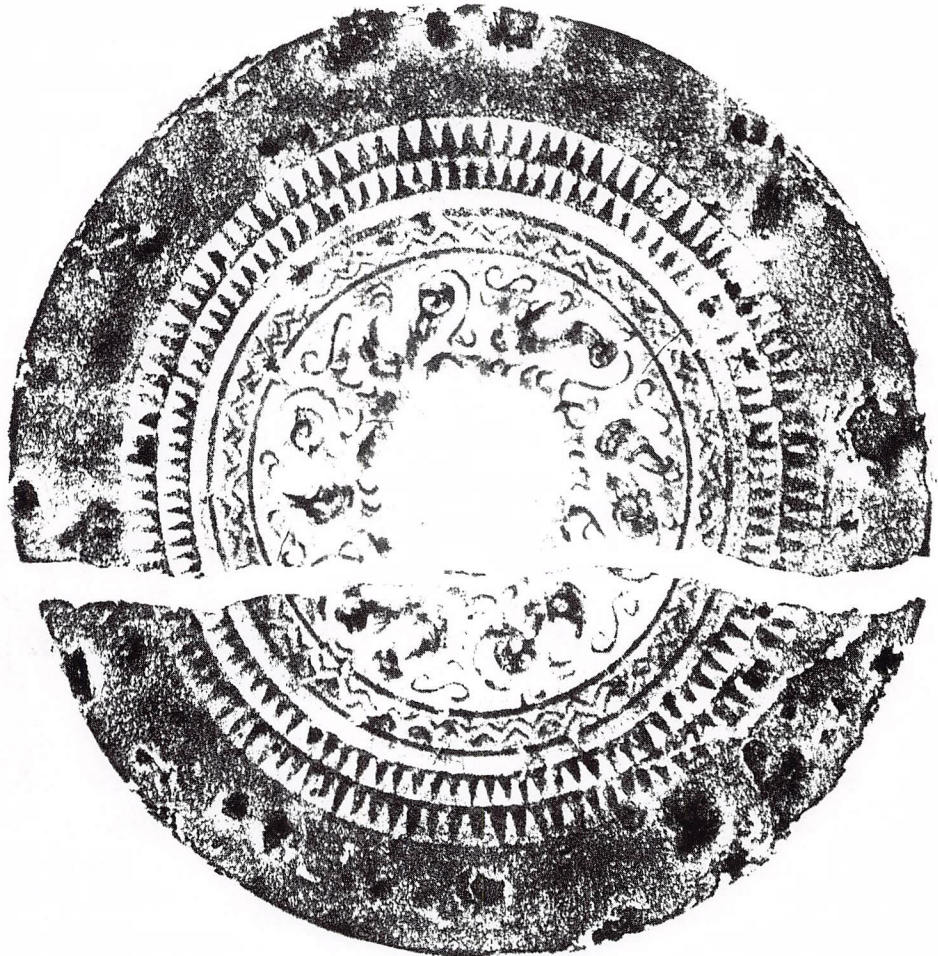
刀身は関付近で身幅 3.5cm、棟幅 0.85cm、切先に近い所で身幅 3.2cm、棟幅 0.85cm で、関から刀身中央部へかけて徐々に細身となる。関部分は状態が悪いが、残った部分から見ると、片関で、切り込みは 0.6cm 程の深さで、緩やかにカーブしているようだ。又、茎から刀身背にかけて、刀の全体形は若干内反り気味になっている。刀身は、部分的に鞘の木質が残っている。関部では、この木質の上に幅 1.1～1.2 cm 程の帯状の圧痕が残っており、鞘口にかけて、更に同じ幅で、木質部が欠けており、有機物の残存が見られる。

茎は、残存している部分の中央に直径 0.3cm の目釘穴がある。又、把の拵として、一部分に直径 0.2mm 幅の糸が残っており、把巻として施されていた様である。又、茎の一部には木質が残っており、関近くに幅 1.1～1.2cm の刳込が施されている。

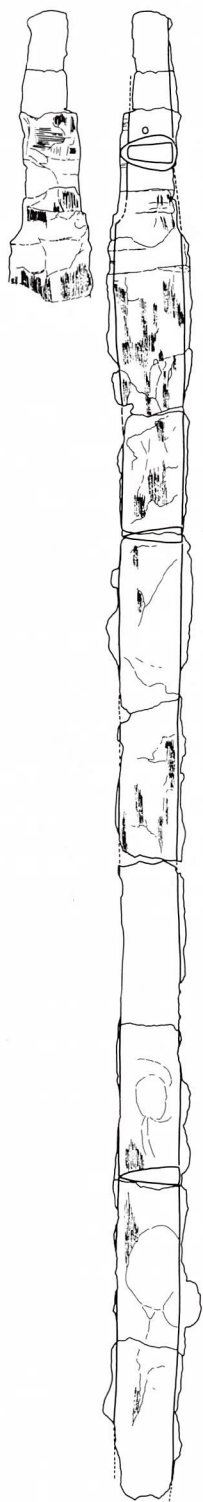
ガラス玉

ガラス玉は全部で 29 個あり、小さいもので直径 5.5～6mm、厚さ 4～5mm、大きいもので直径 9mm、

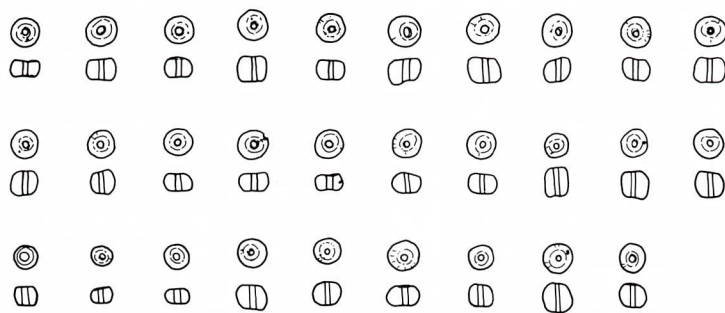
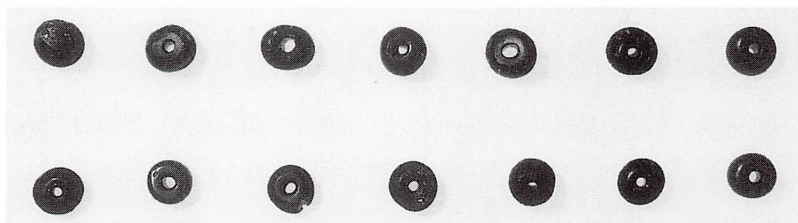
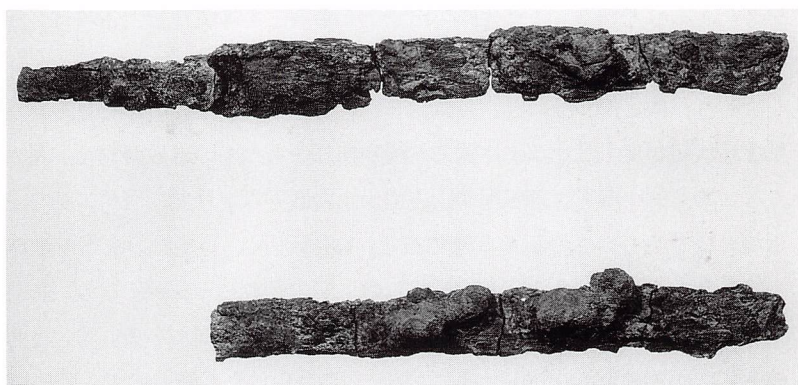
厚さ8～9mmで、この間に、扁平なものから、長いものまで、様々であり、形状も整っておらず、上下の孔のあけられた平坦面がずれて、ひしゃげた形をしているものが多い。色調も、淡青色のものと、藍色を呈するものの二者がある。孔に対して平行に気泡の白いすじが走っているものが多い。



第1図 熊谷市中条出土六獣鏡拓影図 (現寸)



| | |
|---|---------|
| 直 | 六獸鏡写真 |
| 刀 | 直刀写真 |
| 実 | ガラス玉写真 |
| 測 | ガラス玉実測図 |
| 図 | |



0 10cm

0 10cm

第2図 熊谷市中条出土・鏡・刀・ガラス玉

熊谷市上中条は、当さきたま資料館のある行田市の北西に隣接する、熊谷市の北部にあり、南の荒川と北の利根川にはさまれた、荒川によって形成された沖積扇状地上にある。現在は水田地帯で、自然堤防上には集落が散在している。

当地周辺では、古墳群としては、上中条に、14基の古墳からなる中条古墳群があり、東に斉条、酒巻古墳群、南西に肥塚古墳群がある。中条古墳群は3つの支群から構成されている。一つは、上中条支群であり、この中の鹿那^{かなぎ}祇東古墳からは、現在、東京国立博物館に所蔵されている「短甲をつけた男子像埴輪」が出土している。一つは、今井支群であり、中には昭和55年の発掘調査の際に墓前祭祀土器群が発見された鎧塚古墳、そして、昭和56年度に調査された女塚1～4号墳がある。その他に、大塚古墳のある大塚支群がある。(註1)

以上、資料の概況については、先に述べた通りであるが、若干、資料の年代等について触れてみたい。六獣鏡は、獣形の変形が著しく、新しい段階の倣製鏡と思われるが、(註2) 県内では美里町聖天塚古墳(註3)などに類例をみることができる。この古墳は粘土柳で、5世紀前半の築造年代があたえられている。また他県の出土例からみても本資料出土古墳は、5世紀を下らないと思われる。

直刀は、推定長80cm前後、身幅は3.1～3.7cm程で、全体の形を見ると、細身な印象を受ける。関は保存状態が良くないが、片関で、浅い抉りをもつものと思われる。茎は、関の部分から、やや細くなって茎尻へ続く。埼玉稲荷山古墳出土の直刀は、片関で直角に切れ込むものと、斜め、もしくは浅い抉りをもつものがある様である。(註4) 又、いずれの直刀も全体としては細身で5世紀代の特徴をもつものである。6世紀代には、関の切れ込みが深くなり、撫角状にカーブしたものが多く、茎も細身のものが多くなり、刀身が長大化する傾向がある。又、6世紀後半には、鐔の装着に伴って、両関の直刀が出現する。(註5) こういった変遷の中で、この直刀を見れば、稲荷山古墳出土の直刀に近く、5世紀代の特徴を備え、やや古手のものであると言えよう。

最後に、これらの資料が採集された古墳であるが、時期的に該当するものとしては、中条古墳群中で調査された、帆立貝型前方後円墳の、鎧塚古墳、女塚1号墳が5世紀末から6世紀初頭とされており、或いは、このいずれかの古墳から出土したものかとも推測されるが、他にも未調査の古墳も多くあり、特定する事は難しい。

なお、本稿を草するにあたり、明治大学文学部教授小林三郎氏より御指導・助言を賜った。そして、直刀のレントゲン撮影にあたり、県埋蔵文化財センター学芸員岩元克昌氏の協力を得、又、図版の作成にあたっては、法政大学大学院生澤田秀実氏の協力を得た。記して感謝する次第である。

(註)

- | | | | | |
|----|--------|------------------|-----------------|------------------|
| 註1 | 寺社下博 | 鎧塚古墳 | 熊谷市教育委員会 | 1981 |
| | 寺社下博 | 女塚 | 熊谷市教育委員会 | 1983 |
| 註2 | 後藤守一 | 漢式鏡 | 雄山閣 | 1926 |
| | 樋口隆康 | 古鏡 | 新潮社 | 1979 |
| | 小林三郎 | 「古墳時代倣製鏡の鏡式について」 | | |
| | | | 明治大学文科研究所紀要第21冊 | 1982 |
| 註3 | 新編埼玉県史 | 資料編2 | 埼玉県 | 1972 |
| 註4 | 稲荷山古墳 | 埼玉県教育委員会 | | 1980 |
| 註5 | 臼杵 勲 | 「古墳時代の鉄刀について」 | | 日本古代文化研究創刊号 1984 |